

2024年4月14日 青戸教会 「神の僕として」

聖書 ペトロの手紙一 2章11〜16節、同19〜21節 高橋克樹牧師

川島貞雄先生が1月31日に千葉西総合病院にて召されました。2月7日に親族だけで葬儀をされましたので、本日、長く牧師を務められていた青戸教会として川島貞雄先生の追悼礼拝をする運びになりました。親族だけで密葬をするという先生のご意志はいかにも川島先生らしく、青戸教会の皆さんにご負担をおかけしないという思いから下した結論だったのでしょうか。本日は、お配りした略歴を時々見ていただきながら、神さまがいかに川島先生を用いてこられたかをたどりたいと思います。神がこの世で生きた川島先生を用いて、いろいろな業を果たされてきました。その御業をたどりながら、今は神の御懷に抱かれている川島先生を偲びつつ、神の栄光を言い表したいと思います。

お配りした略歴を見ていただくと、教会だけでも大塚平安教会、田園江田教会、田園調布教会、青戸教会で説教、牧会をされ、教鞭をとられた青山学院大学、日本聖書神学校、東洋英和女学院大学でも学生に対する指導をされてきました。特に、日本キリスト教団の認可神学校である日本聖書神学校の教授として、また長く教務部長をされて神学生に牧師としてのあるべき姿を厳しく指導されたことを覚えていと思います。

この略歴は、川島先生が最晩年礼拝出席をされていた豊島岡教会南花鳥集会所の後藤さんご夫妻が、川島先生ご夫妻を車で送り迎えをされている中で、聞き取ったことを時系列でまとめたものを基にしています。ただ、いくつか私が調べ直して訂正をさせていただきました。けれども、後藤夫妻の原稿がなければ、こういう形で川島先生の足跡をたどることはなかったと思います。

私は川島先生が日本聖書神学校を辞して、東洋英和女学院大学に移られた時、神学校（4年制）の3年生でした。東洋英和女学院短期大学が現在ののように、4年制の大学に移行するのに伴って、川島先生の学問的業績が必要だったことで、お誘いを受けたのです。私が神学校を卒業して、田園調布教会の担任教師になった後も、川島先生は月に1回、田園調布教会の協力教師として、朝の主日礼拝の説教にいられていました。それは、日本聖書神学校の創設者で、田園調布教会の創設者でもあった岡田五作牧師との関係性によって、月に1回の主日礼拝の説教にいられていたので、岡田五作牧師は田園調布教会を開拓伝道されて大きな教会に育てられた後、田園都市線の江田駅近くに田園江田教会を開拓伝道しました。ところが、岡田五作牧師が四国のいくつかの教会で伝道活動をされていた途中で、駅のホームで倒れられて、当時田園江田教会の主任牧師でありましたが、病床に伏し、そのために川島貞雄先生が主任担任教師の代務者として2年間説教と牧会を担われて、次の牧師が赴任するまで働かれたのです。また、私が日本聖書神学校で総務部長となって豊島岡教会の牧師との二束の草鞋をしていた時、東洋英和女学院大学の大学院の死生学コースに進学したので、大学院ではしばしば川島先生とお会いしました。そのような縁があつて、川島貞雄先生のご様子はずっと存じ上げてきたわけです。また、川島貞雄先生が日本聖書神学校を去られてからしばらくして、総務部長、教務部長を務めることになり、川島先生の神学校での足跡を知ることにもなったのでした。

少し略歴をさかのぼりますが、川島貞雄先生が中山真多良牧師の感化を受けて、伝道者を志して青山学院大学文学部キリスト教学科に入学されたのが、1952年のことです。後に新約聖書学者である高柳伊三郎教授のゼミに入られたことで新約聖書学の研究に開眼したのです。青山学院大学のキリスト教学科は日本キリスト教団の中でも旧メソジスト教会系の牧師を養成することを主たる目的にしています。そして、ニューヨークにあるユニオン神学大学院に留学したのです。日本聖書神学校はアメリカのドイツ系の福音教会が母体になって戦後できた神学校ですが、温美先生は、この福音教会の一つである須賀川教会の牧師のお嬢さんでした。設立間もない日本聖書神学校は目白教会の幼稚園の机と椅子を用いて授業をするような状態で、戦後、福音教会は教職養成を青山学院のキリスト教学科に委託していました。ですから、須賀川教会の牧師のお嬢さんである温美先生は、青山学院大学のキリスト教学科に入学されたのです。福音教会は田園調布教会や目白教会、小石川白山教会、東金教会、下田教会などが福音教会を源流とした教会です。

ただ、1970年当時は大学紛争の時節で、青山学院大学の、当時の大木金次郎理事長が神学部の教員が学生に同調的だったことを嫌がって、神学部の教員に圧力をかけました。ですから、新約学の荒井献（東京大学へ移籍）、知恵文学の西村俊昭はフランス語の教員として残留（のちに日本聖書神学校教授）、旧約の木田献一（立教大学教授へ移籍）らが他大学に移ったのです。これらの先生たちが、私が入学した頃は、日本聖書神学校の教授であったり、講師であったりしたのです。ですから、当時の日本聖書神学校の教授陣は非常に豪華な顔ぶれでした。川島貞雄先生も一旦は青山学院の専任講師になったのですが、キリスト教学科の教員が目の敵にされて日本聖書神学校に移られたのです。その後、川島貞雄先生は教務部長として学生の教育面を主に指導していたのですが、岡田五作校長の発案によって1971年の学制改革によって、それまで高卒者を入学資格としていたものが、大学卒業者に変更になりました。その時、教務部長名で大学卒業者を入学資格に変更することを公表したので、それまでの高卒の卒業生が反発したのでした。その矛先は教務部長だった川島貞雄先生に向けられ、それ以降、古い卒業生から川島先生が目の敵にされることになったのです。神学校を辞める前に教授会で川島先生を次期の校長にする決議がなされたのですが、理事会でひっくり返ったのも、そういう影響があったのです。こうして、1989年3月をもって川島貞雄先生が日本聖書神学校を辞することになったのです。私に言わせれば、どうして自分が誤解を受けていることに対して弁明をしなかったのかと思います。

川島先生が用いられた大きな業績の一つに、新共同訳聖書の翻訳事業があります。1968年にプロテスタントとカトリックが合同で聖書翻訳をすることとなり、いろいろな聖書学者がこの事業に参加しましたが、川島先生は編集実務委員としてカトリックの堀田神父と共に、最終的な訳語の統一作業を行い、現在、わたしたちが手にしている新共同訳聖書の刊行に尽力されました。当時の日本聖書協会は資金的な余裕があまりなく、川島先生も手弁当で困難な作業をされたのでした。当時のプロテスタント教会は、口語約聖書を用いていましたが、朗読を聞いても理解しづらい難点がありました。また、日本語の表現が古くなっていたため、新しい聖書翻訳の必要性が叫ばれるようになりました。世界的にもプロテスタントとカトリックで共同で聖書翻訳が行われる潮流があつて、日本でも両派合同で聖書翻訳する機運が持ち上がったのです。²

このように、川島先生の足跡をたどってまいりましたが、皆さまも感じられたと思いますが、業績から見るならば決して順風満帆な人生ではなかったのです。

青戸教会の牧師となったのは、ご自分の授洗牧師である中山真多良牧師が青戸教会を開拓し、牧しておられたからです。私は青戸教会での牧師としてのお姿は拝見したことがありますので、礼拝後に教員の方々から牧師としての川島貞雄先生の思い出を語ってもらいたいと考えております。最後に本日与えられた聖書箇所（2か所）を読みたいと思います。2章11〜12節「愛する人たち、あなたがたに勧めます。いわば旅人であり、仮住まいの身なのです。魂に戦いを挑む肉の欲を避けなさい。また、異教徒の間で立派に生活しなさい。そうすれば、彼らはあなたがたを悪人呼ばわりしてはいても、あなたがたの立派な行いをよく見て、訪れの日に神をあがめるようになります」。19〜21節「不当な苦しみを受けることになっても、神がそうお望みだとわきまえて苦痛を耐えるなら、それは御心に適うことなのです。罪を犯して打ちたたかれ、それを耐え忍んでも、何の誉れになるでしょう。しかし、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、これこそ神の御心に適うことです。あなたがたが召されたのはこのためです。というのは、キリストもあなたがたのために苦しみを受け、その足跡に続くようにと、模範を残されたからです」。これらのみ言葉は川島先生の人生そのものを言い表していると思います。

川島先生が神学校を去られる際に、3年生の私たちに言われた言葉があります。「皆さんが牧師になったら、同じ牧師として、神に仕える僕となることを証しするような牧師になってください」。この言葉は神学生に向けた花向けの言葉ですが、川島先生ご自身の歩みを支えてきた言葉でもあると、今改めて思わされています。